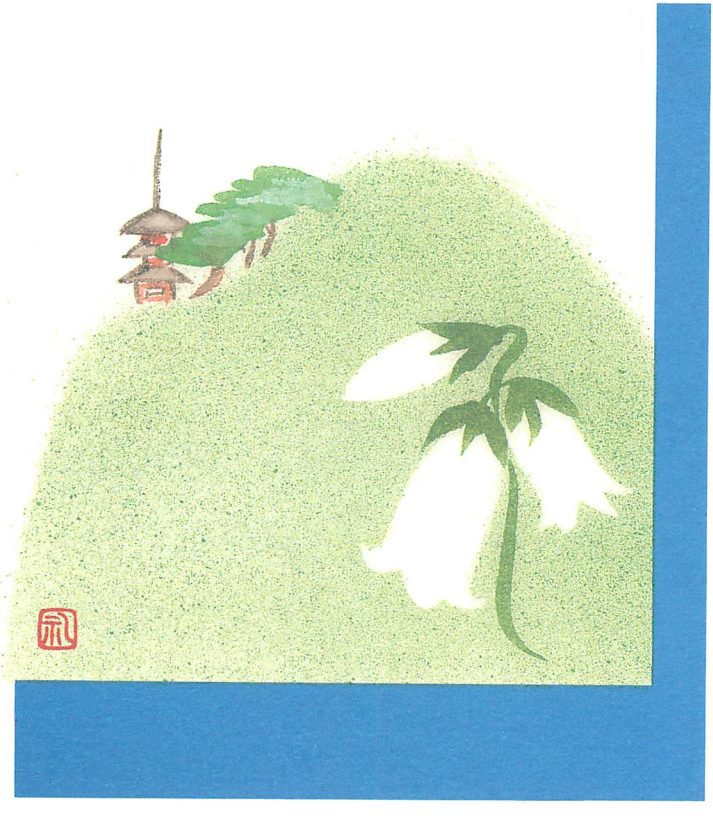
みめぐみの

第4部



みめぐみの

第4部

大谷光道著

目次

御正当……2
聞書……2
人を見て法を説け……4
「信心」
——別の言い方は？……9
御移徙……14
運動神経……15
身業説法……19
指揮者……22
首から下……24
読者の頁……29
あとがき……30

御正当

昨日に続きまして、皆様方大変お忙しい中をお参りいただきまして誠にうれしく思います。

蓮如上人がお亡くなりになって、ちょうど今日が五百年、満で四九九年になるわけで、つまり御正当（ごしょうとう）です。

聞書

今からお食事なのにこういうことを言って恐縮ですが、蓮如上人の『聞（きき）

書（がき）』（『蓮如上人御一代記聞書』）に「お子様方のおしめを洗われた」、ということが書いてあります。

私はこの部分が好きで（笑）、その一言で、たいへん近いところに急に近づかせて頂くような気がいたします。

実はですね、私も若い頃に子供のおしめを洗ったことがあるわけで、比較するのもおこがましいんですが、私が蓮如上人と共通しているのは、この一点だけです（笑）。後は全く似ておらない（大笑）。

ここにその当事者の一人がおりますので話しにくいんですが、上の子二人がまだ小さかった頃、家内と四人で泊まりがけで六甲の方に出かけたときのことです。昨日お参りしていた上の子が一歳、二番目の子が零歳でした。私たちのどちらかがおしめ洗いをせんならん、もう一人が子守をせんならん、こういうことでした。どっちにするか家内とじゃんけんいたしました（笑）。で、私じゃんけんに勝ったんですね。勝ってどちらを取ったかというと、お

しめ洗いの方を取りました（笑）。

後になって他所でこの話が出たときに聞いたところでは、「子守は太閤さんでも嫌がらはった」そうで……（笑）。ですから、まだそれでも私は楽な方を取ったわけです。

そういうことから、蓮如上人と私の仲はおしめである、臭い仲である、こういうことになりました。（笑）。

それともう一つ。最近ではおしめといえば使い捨ての紙の製品になっており、今この話をしておかないと、もう何年かすると、「何でおしめなんかが洗えるのや」などと言われるようになって（笑）、話が通じなくなるでしょう。つまり私たちの文化としても（大笑）今この話をしておかねばならんと思ったからです。

人を見て法を説け

ある有名な布教使のお話にも、蓮如上人のご苦労の生活のところでこのおしめの話が出てきて、そこでは「本願寺の第八代の法主がお子様方のおしめを洗われたんですぞーっ、何と勿体ない、畏れ多いこと……」と言って涙を流されるんです。

これは「敬いの姿」で大変尊いことです。しかしもう一面、今私の言うように、「親しみ」と受け取ることも大事です。

敬いと親しみ、この一見正反対のようなことが、どこで一致するのでしょう。

お説教をよく聞き慣れた方には「敬い」、そうでない方には「親しみ」が大事だと言えます。

「蓮如って、だれ……？　そんな人って居た……？　ああ、そういえば歴史で習った」という人であれば、このおしめ洗いの話を聞いて、「へー、蓮如さんて、話せるじゃん」、関西弁では、「話せるやん」（笑）となり、こう

いう人はやがて念仏信者となる可能性が高く、簡単に〝不謹慎〟とは片付けられません。

私たちは――私はではありません、私たちはです――浄土真宗を喜ぶ、つまりお念仏の生活に安住するのと同じだけ、浄土真宗のコマーシャルをする任務を持っています。「人を見て法を説け」のいい例として、この話をしました。

「畏れ多い」一点張りだと贔屓の引き倒しになりかねないし、近づこうという人を遠ざけたりしたのでは、それこそ蓮如上人に対して「畏れ多い」ことになります。

蓮如上人の五百回の御正当にあたって、本願寺中興・蓮如上人の中興の核心はまさに教線拡張であったことに思いを致し、「上人おしめ洗いの段」（笑）をお話しました。

付け加えますが、教線拡張というのは、何も他宗派や他教、また無宗教の

人たちに念仏に近づいてもらう活動だけをいうのではなく、「門徒」の生まれであってもお念仏を遠巻きにしている人が居られて、阿弥陀様からご縁を待たれている方もたくさんおいでになるのです。

ところで、「おしめ洗い」の話が解ったら念仏信者になったか（笑）、そんなことはありません。

本来おしめ洗いと念仏とは何の関係もありません。当たり前のことです（笑）。

蓮如上人に親しみを感じることが

お念仏に近づく大きな手がかりとなるところが大事なので、皆様方に、ご自身の信心の喜びと同時に、新しく他の方に念仏を勧めていただくための手だてとしていただきたいと思います。

よく「善親友（ぜんしんぬ）」とか、「親友（しんぬ）」という釈尊のお言葉がお経やご和讃に出て来ますが、これは信心を喜ぶ人のことを「親しい友である」とお釈迦様がおっしゃってくださっているわけで、お釈迦様から「友達」とまで言われてはじっとしていられません。これは表現は違っても、同じく「親しみ」の大事なことのお示しでしょう。

このほか、なにも「おしめ洗い」や、「親友」に限らず、お念仏を人に勧めていく手だてはいくらでもあると思います。

そのような手だてを思いついたらお互いに情報交換しながら、お念仏の朗らかな輪が少しでも広がっていくようにご一緒に精進したいと思います（拍手）。

「信心」――別の言い方は？

蓮如上人といえば、いつもやかましくおっしゃったのが、「信心」。蓮如上人でなくても真宗といえば、まず「信心」。でもここで、別の言い方を考えてみたいと思います。

「信心なき念仏は意味がない」、だの、「南無阿弥陀仏だけではだめだ」。そうかと思って、頑張って信心を得ようとすれば「それは自力だ」と言われてしまう。また、お念仏の功徳によってお浄土に行けるのかと思って、一生懸命励んでいると、これまた「往生のための念仏ではない。ご恩報謝の念仏でなければ……」と片付けられる。

「もう、信心、信心でうんざりする」、と思っている方は少なくないでしょう。

私がこんなことを言うと、「おまえも信心の話か」と言われてしまいそうです。「ブルータス、おまえもか」みたいですね（笑）。

難しいついでにもう少し行きましょう。例えば『教行信証』（宗祖親鸞聖人のご著作）の中に次のような表現があります。

聞といふは、仏願の生起本末を聞きて、疑心あることなし

一見、たいへん難しく見えます。これは、

「阿弥陀様が私たち凡夫を迎え取るためのお浄土をこしらえて下さった。そこへ私たちの大勢の先輩がすでに往生している。そういうことを聞いて疑いの心が起こらない。」

という意味ですが、「疑いの心が起こるとか起こらないとか」、という最後の部分だけがわかりにくいために、全体を難しく感じるのです。この辺りが、

浄土真宗の一番わかりにくいところではないかと思います。

「疑う」の反対が「信ずる」なのですが、いずれも上に「本願を」が付くとなぜか抽象的な感じになって、急に訳がわからなくなってしまいます。

そこで、ふと思ったことがあるので、ご紹介しましょう。きっとお役に立つと思います。

「惚(ほ)れる」という言葉があります。「人に惚れる」、「物に惚れる」、或いは「物事に惚れる」。生まれてから今日まで何に惚れたこともないという方、この中におられますか（笑）。

どうも「信心というのは、ひょっとしたらこの言葉がぴったりなのではないか」と思ったのです。つまり、信心と言わずに「阿弥陀様に惚れる」とか「阿弥陀様のご本願に惚れる」といってみてはどうでしょうか。「惚れる」という言葉には、「自分の思いで、努力で――つまり無理をして――一生懸命信じよう」という無理がありません。

「惚れる」ということは、その相手の、対象（物、人）の魅力に引っ張られる。自分のほうが引っ張られるのであって、決して自分の方から、いやなものを無理に好きになろうと努力して好きになるんじゃなくて、なんか知らんけど引っ張られる。なんか知らんけど引っ張られて、わからんけど「好きやねん」（笑）、というのが惚れるということだと思います。

何かわからんけど理屈もなにもなしに好きになるということだし、これこそ浄土真宗の信心のことではないか。

また、信心というのは「自分で作り上げるものではなくて、最初からできているものがそのまま私のものになる」とも教えられます。やはりこれもご本願に惚れるから阿弥陀様のお心をそのままいただくことになるわけです。

来年は、本願寺第二世・如信上人の七百回忌と第十六世・一如上人の三百回忌の年です。如信上人の御正当が一月の四日、一如上人の御正当が四月の十二日（前門様の七回忌の前日）です。

どういうお集まりにするのが良いか、各地の集いの交流を深めていけるよう、皆さんとご相談しながら進めて参りたいと思っております。いずれにしてもこのお二人の上人のいろいろなご事蹟を顕彰（けんしょう）いたしたい。まあ、顕彰なんて偉そうなことといいますが、要は自分自身が勉強するということで、皆様方とご一緒にご旧跡にお参りするなど、両上人を身近に感じることができるいい機会ではないか、と考えております。

御移徙

あのー、聞こえますか。
聞こえません（笑）。
まだしゃべってません（笑）。
前に出て……。
見えるのは見えるけど、声が聞こえません（笑）……。

今日は当家におきまして、先代・無上道院闡如上人の御影の御移徙とその法要をいたしました。前門様が亡くなられてから、今年でもう、まる五年に

なります。従って、来年の四月が七回忌になります。早いものです。

先般のお宅では、前門様の特に音楽による布教、大谷楽苑（がくえん）の合唱ですね、その関係のお話をいたしました。今日は前門様の別の一面をご紹介しようと思います。

運動神経

「子供の頃体が弱かったので回りからスポーツを勧められた」そうで、そのためか、かなりのスポーツマンだったと聞きます。私は末っ子なので盛んな頃のことはよく存じておりません。それでも、関係学校の陸上競技などに力を入れておられたのを覚えています。

私の生まれる前には、スキーは赤倉（新潟）、山登りは日本アルプスの峰々を登られ、馬での遠出などもよくされたようです。

私共兄弟が夏休みに連れて行ってもらったところに深いプールがあって、

穂高にて（昭和13年）

そこに随分高い飛び込み台が付いていました。たぶん七メートルか、七メートルというと三階の窓ぐらいの高さになりますが、飛び込み台が付いていて、私共行ったときには鎖を張って上に行けないようにしてありました。

「昔はあそこから飛び込んだんや」と、得意そうに説明してくださいました。下から見てもぞっとするほど高い飛び込み台でした。

それに比べて私共兄弟は全員、そういう方面はまず駄目でして（笑）、

特に走るのが駄目でしたね。六人もいるんですから一人ぐらい速いのがいてもよさそうなんですが、全員例外なく走るのは駄目でした。食事の時など「走りが遅い」話が出ると、いつも母が肩をすくめていたのを昨日のことのように思い出します（笑）。

私がちょうど小学校の一年生のときでした。運動会に両親も見に来てくれました。最近はどうか知りませんが、一、二、三位までは上級生が旗の所へ連れて行ってくれますね。惜しくも四位だったんですね。だからそこへ連れて行ってもらえなくて、家に帰ってから惜しい惜しいとしきりにみんなに言われました。

ぎりぎり四位になっただけでも、ちょっと大谷家では大したことでした。三位か二位であれば当然、お赤飯が出ることになっておりました（笑）。

この間、うちの上の娘が、下の娘に、「あんた、知らんのか」と。「大谷家で旗が立ったら、お赤飯なんえ」（笑）。上二人は年子ですが、下の子はだい

ぶん年が離れているので、お姉ちゃんの話を感心して聞いておりました。

まあ、それほど、私共息子たち、娘たち、は駄目でした。

前門様が八十歳も大分過ぎられてからのことです。肝を冷やしたことがありました。場所はどこでしたか……、間違えて下へ降りるエスカレータに乗ってしまわれたのです。

私も言わなければよかったのに「お上、そちらと違いますよ」って言ってしまったときには、もう三メートルかそのくらい下に降りてしまっておられたのに、慌ててこちらへ戻って、つまり下りのエスカレータを逆に昇ってこられたんで、今度はこちらが慌てて声が出ないまま……、結局上まで戻って来られました。

私もいらんこと言ったけど、けがをさせなくて良かったな、と胸を撫でおろしました。お年寄りは骨折でもされたら大変ですからね。若い頃鍛えられた貯金がまだまだ残っていたのには驚きました。

身業説法

前門様のことを「身業説法のお方である」と言った人があります。

私は今こうやって一生懸命――まだ仏様のお話はしておりませんが――しゃべっております。しゃべることではなくて、そこにおいでになるというだけで、一緒にいる人がなんとなく手を合わせるような気持になる、お念仏の出るような気持になる、そういうお方でした。

「身業説法」とは、読んで字のごとく「身の業（行い）でもって法を説くこと」で、言葉による説法を口業説法、意志による説法を意業説法といいます。

同様に、お御堂にご出仕のときのお姿、皆さん方覚えてらっしゃると思いますが、内陣へお出ましになるときの出方といいますか、歩き方、それがちょっとやそっとでは真似ができない。

お能――ご存じですね、お面付けて――お能の専門家がその事を聞きつけて、前門様のお勤めに出られる姿を拝みに来た、というより見学に来られたことがあったそうです。前門様のご出仕を見て「うーん」とうなられたという話。なんとも言えないお出ましになるときの、その姿だけから説得されるような、そういうものをお持ちであったということはだれもが口にすることです。

お能については、以前ラジオで専門家が話してられるのを聞いたことがあります。お面にですね、ずーっと体がついていくようにならないといけないんだそうですね。体がお面をかぶっているんじゃなくて、お面に体がついていく、そういうことを専門家がおっしゃっていたのを思い出します。

お能のことは解らないけど、その辺に何か大事なものがあるのかなあと思いました。私も前門様の真似ができたら、とは思いますが、そう簡単にいくわけはありません。

御移徙

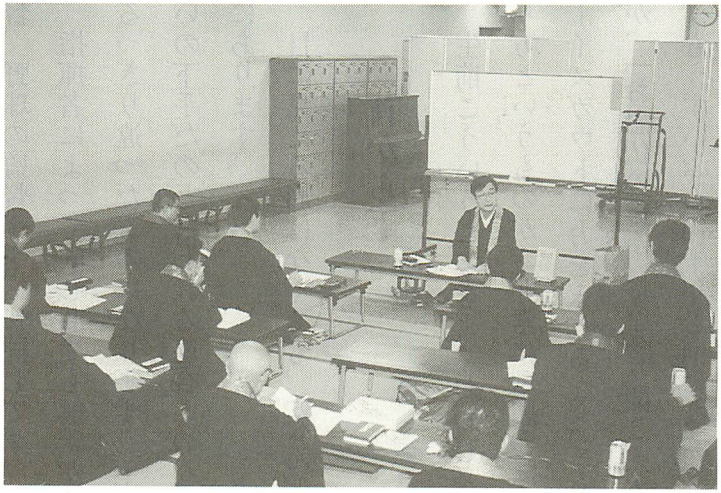
指揮者

お御堂といえば、お勤めのあり方にたいへん厳しいお方でした。お参りになっている皆様方からは見えない、お御堂の裏のことですが、報恩講はもちろん、その都度、ご一緒にお勤めした人たち（僧侶）に色んな注意を与えられました。

「今日のは速すぎた」とか、「粘（ねば）りすぎた」とか。「高すぎた」とか「低すぎた」とか色々な角度から、その都度指導しておられたのを覚えております。それはお仕事上当然といえば当然ですが、外からは目立たぬ部分です。

オーケストラで指揮者が指揮をします。あれと同じことをなさっておられたわけです。そういうことがあったからこそお勤めも引き締まったものを、皆さんのお耳に提供していたんだろうと確信します。

今ごろこんなことを言うと笑われるかもしれませんが、私は最近まで歌を



個人に教える先生と、コーラスの指揮者との違いがわかりませんでした。数年前から私も講師の一人となって、若手の僧侶を中心に声明（しょうみょう）（お勤め）の講習会をしております。たぶん、その関係でわかってきたものと思います。

プロの歌手が集まったコーラスでも指揮者はいます。オーケストラにしてもプロのオーケストラは、各楽器のプロたちを指揮するのが指揮者です。個々の楽器を上手に演奏させるのではなく、指揮者自身の音楽を各人に割り当てて分担してもらうのです。映画監

督、野球の監督……、皆同じです。

指揮者によって同じ曲でも解釈が違うように、お勤めは主宰者によってまるっきり違ったものになります。主宰者がお勤めのプロたち――人から上手いの下手だのと言われる筋合いのない人たち――に注文をつける所以はここにあります。

目に見える形はなくても、「なんとなく違う」お勤めになるわけです。

首から下

生前こういうことをよくおっしゃっておりました。「最近は浄土真宗のあり方というものが、非常に理屈っぽく、観念的になっている。昔は例えばボーイスカウトに力を入れるなど、もっと体を動かすことが盛んだった。」とか、「お念仏の声が、あまり聞こえてこなくなった。」と。

もうずいぶん何十年も前になってしまいましたが、私が大学を出て商社勤

めをしていたときのことです。ニューヨーク駐在で一時帰国中だった十年勤続の先輩に言われたひと言を思い出します。

その先輩が久しぶりに日本に帰ってきて皆の顔を見ながら机の間を通り抜けて行くときに、新入社員で新顔の私を見つけて、首から上と首から下を手振りで示しながら「君ー、今年（この会社に）入ったのか。どこの学校出て来たか知らんけど、ここ（この会社）はこっから上はいらんでー、こっから下だけやでー」と。私は急に言われて、「はー」と返事するのみでした。

要するに、それだけ体力が要るっていうことなんですね。私が頭がいいということではありませんが、また頭がよく見えたはずもありませんが（笑）、いくら頭がよくても商売の足しにはならない、首から下、体がついていくことが大事なんだ、ということを教えてもらったわけです。

「体力」という意味ではないんですが、このことからヒントを得たことがあります。

お念仏を称える、お浄土へ参らしていただくっていうのは、何もこの首から上だけで、頭の中でお浄土へ行けるとか、私は信心を頂いたとかいうことを一生懸命思っていても、こっから（首から）下が付いて来なければ何にもならない訳ですよね。

宗教っていうのは、頭がいいからどうとか、或いは頭が済（すく）われるために信ずるわけではないのであって、私たちのからだ全体がそのまま済われること

がねらいです。むしろ首から下が済われることのほうが大事です。頭だけが済われたらいいなら、そもそも宗教なんて要りませんからね。

御開山聖人がご和讃に「罪障功徳の体となる」、罪障、つまり罪がですね、功徳というまるっきり逆さまのものの材料になる、もとになるということを、おっしゃっております。

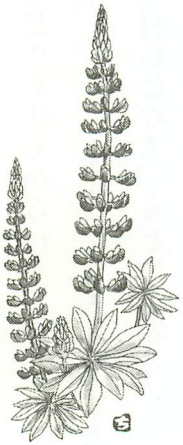
或いは「煩悩がそのまま菩提になる」と。「煩悩」というのはしょっちゅうお耳にされているでしょう。自分では意識しないうちに色々と起こってくる欲望であるとか、愚痴であるとかそういうものが煩悩——つまり、煩わせ悩ませる——のもとになっているんですけれども、それがそのまま今お話している首から下の、つまり我々の生命力でもあるわけですね。

その生命力が阿弥陀様の本願力——お力——によって、そのまま「菩提」——さとり——に切り替わってしまうというわけですね。そういうお念仏の効用といいましょうか、お念仏の力によって先ほどから言います首から下が

――一番大事なお目当てが――本当に済われる。こういうことです。

「首から上」の頭だけの世界でならば、どんなに高潔（こうけつ）で居ることもできる、どんなに美しいイメージでも描いていることはできます。しかし、「首から下」がそれを許さない。その首から上と首から下をつなぐ、これがお念仏なのです。

今年は蓮如上人の五百年にあたっております。また皆様方のお顔を拝見できるよう念願して、今日のお話といたします。



読者の頁

御門跡様をお迎えして感激の余り　**愛知県**　澤田なほ

凩や　笑みたえまさぬ　御お徳
和顔施に　渋面ゆるむ　小春かな
座しませば　み仏の如　冬の講

大阪市　三好きみ子

春うらゝ　萌ゆるが如き　袈裟めして
法を説く君　楽しげに見ゆ

あとがき

みめぐみの刊行委員会

旬の素材は、料理人の腕によって生かされ引き立ってまいります。

素材の持つ本物の味は、料理されてのち、素朴であって、しかも味わい深く、思わず顔がほころんでくる満足感を与えてくれます。

うつわと調和し、美しく後味のよい料理こそ楽しいご馳走となります。

第一部より刊行を続けてまいりました『みめぐみの』も、骨っぽい浄土真宗の教えをこころをこめて調理していただいて、第四部の発行となりました。

浄土真宗の最高のご馳走を、折りある毎に召し上がってください。

日常のご縁として有り難い善知識（ぜんちしき）のみ教えを、全国を巡られたご化導（けどう）の足跡として、今後とも、善き友の輪のひろがりを願って刊行してまいりたく存

じております。

また、講読くださいました皆様からの、感想、質問の紙面をつくり、より身近な親しいみ教えとなりますよう願うことであります。別紙（折込ハガキ）に思いつかれるままにご記入の上、投函又はファックスにてお送りください。

なお、掲載分につきましては、粗品を贈呈させていただきます。

※折込ハガキをご投函くださる際には切手は不要です。

※ＦＡＸは〇七五（三五一）三一二〇（みめぐみの刊行委員会）までお願い致します。

みめぐみの　第4部

1998年7月5日　印刷
1998年7月10日　発行

定価 200円

著　者　大谷光道

発　行　みめぐみの刊行委員会
〒600-8167 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町754
本願寺寺務所内
TEL. 075(351)3555　FAX. 075(351)3120
振替口座　01060-5-56990

印　刷　㈱中外日報社

みめぐみの刊行委員会刊